

①平成 27 年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題	
科学的思考力をベースとするポスト 3.11 社会構築力の育成 －郷土を起点とするグローバルな視点を持った科学技術系人材を育成する教育プログラムの開発－	
② 研究開発の概要	
<p>郷土を起点としてポスト 3.11 社会の実現を考える一連の教育課程や指導法を開発する。行動力・つながり力および持続可能な社会創造に向けた俯瞰的視野を育成し、自ら主体的に課題に取り組み、他に働きかけながら協力し、情報発信できる人材の育成を目指す。</p> <p>また、実験主体の学習を早期から段階的・継続的に展開し課題研究に移行することによって、科学的思考力や研究遂行能力を一層向上させる。</p> <p>科学分野での英語活用に留まらない総合的な英語表現応答力を向上させる。国際性の涵養を図るとともに、多文化共有、共生などの視点を身につける。</p> <p>遠隔地にある大学や研究機関との連携をさらに発展させ、各種研修・講演会・講義を実施し、さらに地元企業などとの連携を図る。生徒の科学技術に対する興味関心を高め、キャリア意識の向上につなげる。</p> <p>小中学生や高校生、科学教育に興味を持つ大学生もSSH関連事業に取り込み、成果を広く普及させる。高校と大学の接続時に生じる様々な問題について意見交換の場を設定し協議を行う。また、大学・地域や社会が求めているものを事業計画に反映させる。</p>	
③ 平成 27 年度実施規模	
主対象を 1 学年普通・理数科全員（243 名）および 2 学年理数科 1 クラス（36 名）、3 学年理数科 1 クラス（36 名）とする。また、2 学年普通科（202 名）は一部の事業で対象とする。	
④ 研究開発内容	
<p>○研究計画</p> <p>第 1 年次</p> <p>(1) 郷土を起点とする学習による行動力・つながり力・俯瞰的視野の育成 学校設定科目「サイエンス・アクセス (SA)」の実施。SA 沿岸被災地研修、SA 講演会（4 回）の実施。SA 研究クラス発表会、全体発表会を実施。研究内容を冊子にまとめた。</p> <p>(2) プレ理数科教育と課題研究を中心とした科学的思考力の育成 学校設定科目「ベーシック・ラボラトリ (BL)」の実施。学校設定科目「サイエンス・プロジェクト (SP)」における課題研究の実施と各種発表会の開催、研究集録の作成。論文コンクール等への応募。各種学会高校生セッションなどでの発表、岩手県理数科課題研究発表会、東北地区 SSH 指定校発表会、SSH 生徒研究発表会などへの参加・研究成果の発表。セミナー「アドバンスト・ラボラトリ (AL)」として、岩手大学・岩手県立大学での研修を実施。</p> <p>(3) グローバルな視野と英語コミュニケーション能力の育成 学校設定科目「サイエンス・イングリッシュ (SE)」を実施し、課題研究英語発表会を開催。キズナ強化プロジェクトによる北米派遣で「SA 沿岸被災地研修」で学んだことを英語でプレゼンテーションし、海外高校生との交流を行った。</p> <p>(4) 教育プログラムを実施できるシステムの拡充 出前科学実験を小学校や沿岸被災地の放課後児童クラブ実施。講演会や大学教官などによる特別講義を開催。</p> <p>・SSH 講演会：全校生徒を対象に年 1 回開催。</p>	

- ・SSH 特別講義：2 学年普通科理系と理数科を対象に年 3 回実施。
- ・英語講演会：2 学生を対象に年 3 回実施。
- ・岩手医科大学での研修，筑波研修（2 泊 3 日），横浜研修（生徒研究発表会への参加）（1 泊 2 日）の実施。

（5）高大接続およびSSH研究の推進

SSH 交流会支援の事業として東北地区 SSH 指定校担当者等教員研修会を本校が幹事で開催。その他研修会への職員派遣。先進校視察の実施。

第 2 年次

第 1 年次の実施状況を踏まえ，修正を加えながら学校設定科目，大学・研究機関での研修，講演会，特別講義などを実施した。学校設定科目「ベーシック・ラボラトリ」の印刷テキストを作成した。学校設定科目「サイエンス・アクセス」の研究内容を印刷物にまとめた。県内 6 社で企業研修を実施した。SSH 交流会支援の事業として岩手県 SSH 指定校等中間発表会を本校が幹事で開催した。

第 3 年次

学校設定科目「サイエンス・アクセス」において，協調学習を取り入れた科学と社会の関係を考える学習を実施した。

「サイエンス・イングリッシュ I」の内容をまとめた教材集を作成した。第 1・2 年次の反省や中間評価での指摘事項を踏まえ，さらに 3 年間の事業計画を細かく分析・検証し，それをもとに取り組みの改善充実を図った。また，これまで作成したテキストの内容を精査し，教育効果が高まるように工夫し，内容を修正した。

第 4 年次

第 3 年次終了時点で新規 SSH 研究開発が一巡した。各種アンケートなどの結果から事業全体の見直し，改善を図った。教育課程全体を見直し，学校設定科目の内容を再検討し，テキストおよびシラバスを修正した。校内および諸機関とのコンセンサスのもと，長期的展望に立った次期計画の準備を開始。SSH 成果報告会を開催した。

第 5 年次

最終年次として本研究の総括を行う。「ベーシック・ラボラトリ」「サイエンス・イングリッシュ」「サイエンス・アクセス」など，普通科高校での実施も考慮した授業法や教材を作成する。すべての取り組みと成果を検証し，SSH の成果の普及，地域貢献に向けた総括を行い，大学，全国の SSH 校，近隣の高校，小・中学校に向けて発信する。

○教育課程上の特例等特記すべき事項

（1）SSH による教育課程の特例とその適用範囲

- ・教科「情報」における「社会と情報」は標準 2 単位を 1 単位に減じ，「サイエンス・アクセス（1 学年 1 単位）」「ベーシック・ラボラトリ（1 学年 1 単位）」で情報の活用等を取り扱う。
- ・「総合的な学習の時間」は，1 学年および理数科では開設せず，普通科では合計 2 単位とする。総合的な学習の時間で育成すべき問題解決能力などは，「サイエンス・アクセス」「ベーシック・ラボラトリ」「サイエンス・プロジェクト」で対応する。
- ・理数科における理数理科 3 科目履修は，「理数理科」2 科目と「理数地学」「サイエンス・アクセス」「ベーシック・ラボラトリ」「サイエンス・プロジェクト I・II」の履修で対応。「課題研究」は「サイエンス・プロジェクト I・II」の中で実施。

（2）教育課程の特例に該当しない教育課程の変更

教科「外国語」の中に，学校設定科目「サイエンス・イングリッシュ I（1 学年 1 単位）」，「サイエンス・イングリッシュ II（2 学年 1 単位）」「サイエンス・イングリッシュ III（3 学年 1 単位）」を開設。

○平成 27 年度の教育課程の内容

1 学年普通・理数科において「サイエンス・アクセス（1 単位）」「ベーシック・ラボラトリ（1 単位）」「サイエンス・イングリッシュ I（1 単位）」を実施した。

2 学年理数科において、「サイエンス・プロジェクト I (2 単位)」「サイエンス・イングリッシュ II (1 単位)」を実施した。

3 学年理数科において、「サイエンス・プロジェクト II (1 単位)」「サイエンス・イングリッシュ III (1 単位)」を実施した。

○具体的な研究事項・活動内容

(1) 郷土を起点とする学習による行動力・つながり力・俯瞰的視野を育成する教育システムの開発
学校設定科目「サイエンス・アクセス」では、郷土を起点とした社会と科学の関係を考える研究・学習を実施した。講演会や研修で研究を深め、研究の内容を口頭発表やポスターセッションで議論し、論文にまとめた。

(2) プレ理数科教育と課題研究を中心とした科学的思考力を育成する教育システムの開発
学校設定科目「ベーシック・ラボラトリ」では、1 学年で実験中心の授業を行った。科学的思考力や科学技術に対する興味関心を喚起するとともに、基礎的な実験器具の取り扱い方やデータの整理・活用法が身につくような授業法および教材を開発した。

学校設定科目「サイエンス・プロジェクト」で課題研究に取り組み、その内容を口頭発表し、論文にまとめ、英語で発表した。その活動を通し、研究遂行能力や科学的思考力、表現力などを高めた。

セミナー「アドバンスト・ラボラトリ」で、大学や外部機関と連携した実験中心の研修を実施した。

(3) グローバルな視野と英語コミュニケーション能力を向上させる教育システムの開発

学校設定科目「サイエンス・イングリッシュ I・II・III」で、英語による科学実験、英語課題研究発表など、科学分野での英語活用を通じた英語の理解力・表現力を高め、英語で討論できる力を身につけることを目指した教材および指導法を開発した。企業研修で学んだ内容を振り返り、英語ポスターを作成し、岩手大学留学生等を招いてプレゼンテーションと質疑応答を行った。

(4) 教育プログラムを実施できるシステムの拡充

大学との連携をさらに発展させ、企業や研究機関とも連携しながら、生徒の科学に対する興味関心やキャリア意識の向上を図った。また、小学校での出前授業、県内 SSH や理数科設置校と連携した発表会、管内の小中学校や地域等に向けて SSH 成果発表会を実施し、SSH の効果を普及させた。

・出前授業を管内小学校 5 か所・沿岸被災地における放課後児童クラブで実施した。

・講演会や大学教官などによる講義を実施した。

SSH 講演会 (全校生徒を対象、年 1 回実施)

SSH 特別講義 (1・2 学年対象、年 3 回実施)

SSH 英語講演会 (2 学年対象、年 2 回実施)

SA 講演会 (1 学年対象、年 2 回実施)

SSH 企業研修 (2 学年理数科対象、合計 5 企業で実施)

(5) 高大接続および SSH 研究の推進

SSH 成果発表会を実施し、SSH 研究開発第 3 期 4 年間の取り組みを中心に地域の小中学校や保護者に対して成果普及を行った。接続カリキュラムや入試制度の在り方など高校と大学の接続時に生じる様々な問題について考える場を持ち、大学および地域社会が SSH に対して求めている姿を探り、事業計画に反映させた。

東北地区 SSH 指定校等教員研修会、その他研修会への職員派遣、先進校への視察を通して、SSH 事業の在り方を考え、科学技術系人材の育成に向けた効果的な事業展開を図った。

⑤ 研究開発の成果と課題

○実施による成果とその評価

(1) 郷土を起点とする学習による行動力・つながり力・俯瞰的視野を育成する教育システムの開発
学校設定科目「サイエンス・アクセス (SA)」では、1 学年全員を対象に、社会と科学技術の関係などにかかわる内容について調査、現状分析を行い、課題を明確にして根拠に基づく解決策を示してい

くグループ研究を行った。昨年度に引き続き SA 研究の指導が軌道に乗り、本年度の指導体制もスムーズに進んだ。SA で実施した講演会や岩手県立大学研修、沿岸震災復興現地研修会は生徒が意欲的に参加した。生徒は研修を通して知識や技能が身につく、SA 研究に対する興味や意欲が高まったといえる。実際に参加した生徒のクラス発表のスライドやポスターを見ると、自分たちが調べた内容に研修で学んだことを加えており内容に深まりが見られた。授業を実施した教員は、社会が抱える課題に対してそれぞれの分野から解決を探り、取り組む機会になり、研究プロセスは、今後の課題研究を進める基盤作りとなると効果を実感した。

(2) プレ理科教育と課題研究を中心とした科学的思考力を育成する教育システムの開発

学校設定科目「ベーシック・ラボラトリー (BL)」は指導の内容を見直し、2 学年で実施する課題研究に必要な技能と知識が生かされるように検討し、適切な内容を実施した。また、今年度実施した「BL」の内容を教材集としてまとめ、成果普及に活用した。

学校設定科目「サイエンス・プロジェクト (SP)」では課題研究の内容を深化させるための大学研修やプレゼンテーション能力を向上させるための SP 講演会「話す技術・伝える技術」を通して課題研究の向上に努めた。平成 27 年度 SSH 生徒研究発表会で生徒投票賞、東京理科大学理窓会主催「坊っちゃん科学賞研究論文コンテスト」で優秀賞を受賞するなど課題研究の内容を各種科学論文コンクールや学会で発表し、評価を得た。

(3) グローバルな視野と英語コミュニケーション能力を向上させる教育システムの開発

課題研究英語発表会は今年度で 5 回目となり、ループリックとそれに基づく生徒の相互評価の結果等から全般的に目的を達成しているといえる。また、2 学年理科がリハーサルから参加することで質問する下地ができ、課題研究英語発表会の活発な質疑応答につながった。さらにこの取り組みは、企業研修事後学習英語ポスターセッションに生かされ、活発な意見交換をすることができた。

(4) 教育プログラムを実施できるシステムの拡充

「筑波研修」、「大阪研修」、「岩手医科大学研修」、企業研修、SSH 講演会、SSH 特別講義、小学校等への出前授業など、大学や公的研究機関、民間企業、博物館、小学校等様々な場所で様々な職種の方々から指導を受け、教育プログラムの拡充に努めた。学校設定科目で実施した大学研修を含めて、数多くの研修や講演会等を実施することで、参加者生徒は研修内容に興味を持ち、知識や技能が身についたと実感した。

地域の小学校において実施してきた出前授業は開催希望が年々増加し、今年度 5 回開催した。出前授業を通して、SSH の成果普及を行うことができたとともに、活動を通して生徒のコミュニケーション力の向上に効果があった。

(5) 高大接続および SSH 研究の推進

SSH 成果発表会を実施し SSH 研究開発第 3 期 4 年間の取り組みを中心に地域の小中学校や保護者に対して成果を普及することができた。また、県内外の高校や大学から多くの参加者を迎え、研究開発を行う上での指導や意見を受けることができた。

○実施上の課題と今後の取組

- ・ SA ではグループ内の個々の関わり方に対する評価を明確にするため、活動についてのループリック評価を取り入れ、生徒同志の相互評価や担当者の評価を検討する。
- ・ 課題研究の内容は、テーマに対する目的の定め方、内容のまとめ方や発表技術の向上についても計画的・組織的な指導に重点を置いて取り組む。また、自然科学部の活動とも連動させながら、より幅広い生徒に課題研究の取り組みがなされるよう工夫する。
- ・ 次世代を担う社会人育成ため、文系志望者にも科学的素養が身に付く取り組みを今後も実施する。
- ・ 各プログラムの評価は、生徒・保護者・教師による意識調査、教師の生徒観察、生徒の作成したレポートなどを参考に実施している。各プログラムで向上した能力を適確に評価する方法を検討する。

②平成 27 年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発の成果と課題

① 研究開発の成果	
<p>(1) 郷土を起点とする学習による行動力・つながり力・俯瞰的視野を育成する教育システムの開発</p> <p>学校設定科目「サイエンス・アクセス (SA)」では、1 学年全員を対象に、社会と科学技術の関係などにかかわる内容について調査、現状分析を行い、課題を明確にして根拠に基づく解決策を示していくグループ研究を行った。昨年度に引き続き SA 研究の指導が軌道に乗り、本年度の指導体制もスムーズに進んだ。生徒が授業後に記録する「SA 活動記録」は毎時間記入後、担任・副担任が確認した。また、活動に用いた資料は「SA ファイル」に綴じ、「SA 活動記録」とともにポートフォリオ評価として生かされた。研究のまとめ、評価として実施した小論文の内容は、SA 研究でまとめられたポスターの内容が生かされ、具体的な分析や幅広い見方や考え方ができるようになった。SA で実施した講演会や岩手県立大学研修、沿岸震災復興現地研修会は生徒が熱心に参加した。生徒は研修を通して知識や技能が身につく、SA 研究に対する興味や意欲が高まったといえる。実際に参加した生徒のクラス発表のスライドやポスターは、自分たちが調べた内容に研修で学んだことを加えており内容に深まりが確認できた。</p> <p>授業を実施した 1 学年の教員は、「社会が抱える課題に対してそれぞれの分野から解決を探り、取り組む機会になった」「物事を多面的に深く考えるきっかけとなり、発表等を通して考えを深化させることができた」「発表の資料作製能力が向上した」「プレゼンテーション能力と発表を通じたコミュニケーション力の向上に効果があった」「問題を発見し、その解決法を模索するプロセスは、今後の課題研究を進める基盤作りとなる」などと効果を実感した。</p> <p>平成 27 年 12 月に実施した「SSH に関するアンケート」からは、SA 研究は調査により現状を把握し、班の意見を取り入れて検証を繰り返す活動で内容が深まり、クラス発表会やポスターセッション等、全体への発表を通して意見を得て、それにより新たな発想や考え方が生まれ、それらの活動が発表技術の向上に寄与し、科学的な考え方が身につく、社会と科学の関係を考えるうえで有効であるといえる。</p> <p>(2) プレ理数科教育と課題研究を中心とした科学的思考力を育成する教育システムの開発</p> <p>学校設定科目「ベーシック・ラボラトリ (BL)」は 1 学年時の履修科目が物理基礎、生物基礎に変更されたことを機に、化学と地学分野の内容を見直し、2 学年で実施する課題研究に必要な技能と知識が生かされるように検討した。授業後のアンケート結果からは、概ね適切な内容を実施したと判断できる。また、平成 27 年 12 月に実施した「SSH に関するアンケート」からは、BL の授業を通して「実験技能が身についた」「科学的に考える姿勢が向上した」などの学校設定科目の目的に対し、肯定的に答えた割合が増加した。平成 24 年度から実施した BL の教材が蓄積及び深化し、内容が深まったことが生徒の高評価につながったと考える。</p> <p>今年度実施した「BL」の内容を教材集としてまとめ、成果普及に活用した。</p> <p>学校設定科目「サイエンス・プロジェクト (SP)」では課題研究の内容を深化させるための大学研修を合計 3 日間実施した。参加した 2 学年理数科の 8 割が課題研究に役立ったと答えた。また、プレゼンテーション能力を向上させるための SP 講演会「話す技術・伝える技術」を通して、ものごとを聴衆にわかりやすく伝える方法や技術を学び、課題研究の発表に生かされた。</p> <p>全校生徒を対象に実施した「SSH に関するアンケート」より SP I、SP II の課題研究について検証した。「学校で行う課題研究は、将来の自分にとって有益であるか」という問いに対し、課題研究を实</p>	

施していない1学年や2学年、3学年の理系生徒では、調査結果に大きな差は少ないが、課題研究を実施した理数科では肯定的な意見の中でも4と答えた割合が高くなった。また2学年理数科より3学年理数科の方が19%高いことから、SPで実施している課題研究は生徒自身の将来設計に対して有益であり、その実施期間が長いほどその効果を生徒は実感しているといえる。

(3) グローバルな視野と英語コミュニケーション能力を向上させる教育システムの開発

学校設定科目「サイエンス・イングリッシュ I (SE I)」では、英語で実験を進めていく化学実験「炎色反応と沈殿反応」に加え、生物実験「酵素のはたらき」の教材を開発することができた。実験後にはもう一度英語で理科実験をしてみたいとの感想が多数見られたことから、生徒の興味関心を高めることにつながったといえる。英語が得意ではない生徒も積極的に理科実験に参加し、英語を使おうとする姿勢が見られた。この授業の実施にあたり、英語と理科との教科横断的な取り組みを進めることができた。

SE IIで実施した企業研修事後学習英語ポスターセッションでは、時間が制約されるなかで準備を進めた。また、ポスターセッションにおいて”Show and Tell”を取り入れ、プレゼンテーションを工夫することで聴衆を引き込むことにも成功した。発表では、限られたボキャブラリーではあるが、質疑応答に積極的に取り組む姿勢が多く見られた。指導助言を頂いた大学関係者や企業の関係者からは、「高校生であれほど高いレベルの英語でプレゼンテーションができてるのはすばらしい。指導の工夫を知りたい」「生徒のプレゼンテーションの仕方を見ると、企業研修の内容が生徒にとっても楽しめる内容であったことが伝わった」などと評価された。また、企業研修事後学習英語ポスターセッションのルーブリックによる指導助言者等の評価からは生徒の発表も概ね満足する内容であったといえる。

SE IIIで実施した課題研究英語発表会は今年度で5回目となった。ルーブリックとそれに基づく生徒の相互評価の結果からは、各項目とも高い数値を示し全般的に目的を達成しているといえる。また、2学年理数科がリハーサルから参加することで質問する下地ができ、課題研究英語発表会の活発な質疑応答につながった。さらにこの取り組みは、企業研修事後学習英語ポスターセッションに生かされ、積極的に質問をしようとする態度が向上した。

(4) 教育プログラムを実施できるシステムの拡充

先端科学技術の一端にふれ、理科学研究と科学技術について理解を深める「筑波研修」、博物館で学芸員の講話等やSSH生徒研究発表会に参加した「大阪研修」、生命に対する畏敬と尊敬の念を深め生命倫理に対する意識を深める「岩手医科大学研修」、郷土の産業や技術を理解し郷土と国際社会に貢献する人材の育成を目指す「企業研修」、北上山地への誘致が期待されているILCに対する理解と関心を高めるSSH講演会、1学年・2学年の幅広い生徒を対象に合計3回実施したSSH特別講義、小学校等への出前授業など、大学や公的研究機関、民間企業、博物館、小学校等様々な場所やバリエーションあふれる方々から指導を受け、教育プログラムの拡充に努めた。学校設定科目で実施した大学研修を合わせると、研修で訪問した外部の施設は延べ28カ所、指導や講演をした方々は延べ66人以上になる。また、実施した研修後のアンケートから参加者は研修内容に興味を持ち、知識や技能が身についたと実感しており、実施内容も概ね満足いくものだったといえる。

地域の小学校における出前授業は小学校からの開催希望が増加し、5回(昨年度3回)開催した。地域の小学校に対して、水沢高校のSSHの出前授業への認知が高まり、成果普及の効果の現れといえる。また、昨年度岩手県立大学と本校だけで行ったフィールドワーク研修の講座が、本年度は一般の高校生向けの講座として広く呼び掛けられ実施された。このことは水沢高校と大学との高大連携による取り組みが、県内外に向けて広がりを見せて教育プログラムを実施するシステムが拡充された現れといえる。

(5) 高大接続およびSSH研究の推進

SSH 成果発表会を実施し SSH 研究開発第 3 期 4 年間の取り組みを中心に地域の小中学校や保護者に対して成果普及することを目的に実施した。また、県内外の高校や大学から多くの参加者を迎え、研究開発を行う上での指導や意見を受けることができた。

昨年度実施した卒業生調査を継続し、平成 16 年度から平成 25 年度の SSH 主対象卒業生 393 名に対してアンケートを実施し、150 名から回答を得た。

② 研究開発の課題

(1) 郷土を起点とする学習による行動力・つながり力・俯瞰的視野を育成する教育システムの開発
SA の今後の課題は、次のことが挙げられる。

- ・ SA 小論文は SA 研究を始める前と、SA 研究の活動の終わりに実施し、小論文の内容や語句の量を前後で比較することで、SA 研究の成果をより詳細に分析することができると考える。
- ・ 現状把握のために研修に参加する生徒も多く、そのことが発表でも生かされている一方で、調べ学習の域を超えていない班もある。休業中等にフィールドワークの場面を作る必要がある。
- ・ グループ内の個々の関わり方に対する評価が難しい。活動についてのルーブリック評価を取り入れ、生徒同志の相互評価や担当者の評価を明確にする必要がある。

(2) プレ理数科教育と課題研究を中心とした科学的思考力を育成する教育システムの開発

セミナー「アドバンスド・ラボラトリ」実施後、参加者全員のアンケート結果ではどの項目でも肯定的な回答がほとんどであるが、「進路に対する意識が高まった」については、肯定的な回答がやや低くなっている。しかし、全校生徒から参加希望者を募り、その希望者を対象とした岩手県立大学フィールドワーク研修、岩手大学研修Ⅱでは肯定的な回答がそれぞれ 92%、90%に上がる。一方、課題研究の深化を目的とした岩手大学研修Ⅰでは、実施後のアンケートで「課題研究に役立った」という項目について肯定的な回答した割合が 8 割を超えていた。よって、理数科課題研究の深化を目指すという当初の目的が達成できていると考える。以上より、大学と連携した研修を実施する際には、ねらいを明確にし、そのねらいを達成するための実施方法を進めることが大切であるといえる。

(3) グローバルな視野と英語コミュニケーション能力を向上させる教育システムの開発

SEⅠで実施した英語プレゼンテーションでは発表原稿を持たずに発表を行ったことで、聴衆とアイコンタクトを取り、効果的なプレゼンテーションになったが、英語で質問するところまではできなかった。今後はポスターセッションなど発表方法を変えて質問をさせるアクティビティーの工夫が必要である。

SEⅡで実施した企業研修事後学習英語ポスターセッションは、大学の先生や留学生等、企業関係者から高い評価を受けたが、ポスターの文字数を少なくしてわかりやすくすること、発表後の質問を予測して準備させること、インターネットの企業のホームページに載っていない情報を評価することでより充実した学習になると考える。

課題研究英語発表会は活動のノウハウが蓄積され毎年レベルが上がっている。発表を通して英語の質疑応答に関しては、質問に英語で答えてはいたが、根本的な英語力の不足を多くの生徒が実感した。このような活動を継続することで英語コミュニケーション能力の向上が図れると考える。

(4) 教育プログラムを実施できるシステムの拡充

大学や企業、地域と連携し、数多くの事業を展開したが、このような機会を今後も取り入れて地域に貢献する人材を育成することが水沢高校としての責任であると自覚し、継続していく必要があると考える。